調査報告

架橋離島と小規模離島のいま③

山口県下関市の島々（六連島篇）

本誌編集部

本州最西端の自治体として知られる山口県下関市には、離島振興法指定離島である六連島（七二人、令和二年国勢調査）と蓋井島（八四人）、対本土架橋によって法指定を解除された角島（六五〇人）の有人三島が所在する。これらの島々の現況について、数回にわたり紹介する。

市の南西部に位置する六連島へは、市内の中心的な駅である下関駅から徒歩五分の竹崎港より、市営船で一日四便片道二〇分かけて渡航する。観光客数は年間五〇〇〇人ほどだが、令和五年六月四日は「六連の日」イベントの開催日であり、一〇〇人を超える参加者が島に訪れた。今号では、六連島の産業と当イベントを中心に報告したい。

冬キャベツから花卉栽培へ転換

関門海峡の北西、下関港から西に約六キロの響灘に位置する六連島は、海運や海防の要所であり、タンクターミナル「六連油槽所」を擁し、平成二二年までは海上自衛隊六連警備所が置かれていた。海抜約八〇～九〇メートルに台地が拡がり、そこを中心におよそ二〇ヘクタールの畑地となっている。漁業も営まれているが、主産業は農業である。

人口集中の著しい大都市部に野菜を安定的に生産供給するため、昭和四一年に制定された「野菜生産出荷安定法」で彦島農協（当時）はキャベツの国指定産地となり、その管内である六連島もキャベツを共同出荷するようになった。また、指定産地となったことで、たとえ市場価格が下落しても補給金により安定した収入を得ることができた。島内で主に栽培されたのは冬期に収穫される冬キャ

ベツ。主要品種は「大御所（おおごしょ）」で、同五〇年代には「六連キャベツ」として広く知られるようになった。

六連島園芸組合で役員をしていた目黒一彦さん（八一歳）によると、最盛期には一二月から四月までの五カ月間で一二〇〇トンのキャベツが出荷されていた。一〇キロ七、八〇〇〇円で取引されており、「青いダイヤ」とも呼ばれたという。六連キャベツは南氷洋に向かう捕鯨船団に積み込まれ、観光業者の手でグアム島に輸出されるなど、国外にも出荷された。「遠洋まで輸送する時は、キャベツの〝しり〟に石灰を塗り、炭俵で包んで納品することで日持ちさせていた」と目黒さんは語る。

昭和五〇年代には、冬キャベツの生産とともに花卉栽培も始まる。最初はキクやキンギョソウが栽培された。同六〇年頃にはキク（電照菊）、カーネーションがハウスで育てられるようになり、六連島の農業は冬キャベツから花卉栽培に転換していくこととなる。その背景には、キャベツと比べて、花卉が安定して高い単価で取り引きされたことや、キャベツの段ボール梱包や輸送の負担が大きかったことなどが理由に挙げられる。

冬キャベツは露地栽培だったが、花卉栽培にはビニールハウスが必要になる。花弁を大きくするためには冬期の温度維持が欠かせない。鉄骨とビニールで組まれるハウスを一棟建てると現在は五〇〇〇万円ほどの費用が掛かるが、それでも昭和終期から平成初頭のバブル経済時には数年で導入費用を回収できたという。平成三年九月、下関市沿岸に襲来した台風一七号の被害は甚大で、ビニールハウスの三分の二が倒壊したため、翌四年に国庫補助事業で二〇年はもつといわれる強化プラスチックハウスを整備した。ガラス製のハウスにしなかったのは、台風被害にあったときガラスが飛散しないようにするためだという。現在、重油ボイラーによる暖房代は年間一〇〇万円近く掛かる。

前述の経緯でキャベツの出荷は減り、六連島は花卉栽培の島として知られるようになった。農道の整備と灌漑排水

武島正文自治会長（左）と植村秀彰副会長。

事業により、最盛期には園芸農家が四〇軒ほどにもなり、二億円を超える年間生産額を誇っていた。現在は六〇〇〇万円ほどで、主な品目はガーベラ、スターチス、デルフィニウム、ヒマワリ、キクなど。六連島自治会副会長であり前園芸組合長である植村秀彰さん（六九歳）によると、「ガーベラは平成一二年から栽培しており、年間を通してもっとも多く出荷しているが、現在も島内で栽培しているのは自分と中林憲和組合長だけ。二四、五種類を周年で出荷している」とのこと。六連島の花は、日持ちがよいと評判だという。

花卉栽培と出荷の現状

秀彰さんの次男で、若手花卉農家の植村恵介さん（三九歳）は、ヒマワリ、カーネーション、ユリを主に栽培している。啓介さんは国の事業で農業研修を受け、一四年前に新規就農者としてUターンした。島に戻った当時は、県の推奨でソリダゴなどを栽培していたが、景気や流行で需要が左右されることや、連作障害が起こりやすい性質から、現在ソリダゴは栽培していないという。Uターン時、新規投資なしで中古のビニールハウス九棟を譲り受けることができたが、現在では必要経費の上昇から新規就農のハードルは高くなっているのではないか、と語る。

恵介さんは、自分を含め二人しか同年代の後継者がいないことに危機感を

植村恵介さんは山口県離島青年推進員連絡協議会で農業部長も務める。

六連島園芸組合所有の花卉運搬船で出荷。

覚える。島内には恵介さんの子ども四人を含め、小中学生が六人、未就学児が一人いるものの、小学校は昭和四五年に閉校、小学校跡地に建設した保育園も近年閉園した。周囲の農家では子どもたちに家業を継がせない大きな流れがあるようだ。

「農地は空いているので、今回の交流イベントで島を訪れ、農業をしたいという人が出てくればいいが」と恵介さんは話す。

花卉は栽培者単位で六連島園芸組合が所有している花卉運搬船に積み込み、出荷する。週二回、競りの前日である木曜と日曜に、市内の南風泊（はえどまり）港と北九州の日明（ひあがり）港に陸揚げし、それぞれ下関合同花卉地方卸売市場と北九州花市場（福岡県花卉園芸農協地方卸売市場）に業者がトラックで輸送する。花は、各市場で出荷者個人名義で競りにかけられる。

なお、この花卉運搬船は平成七年に国・県・市の補助によって建造され、後年にエンジンのみを積み換えている。維持費は保険などを含めて年間一五〇万円ほどで、花の出荷だけではなく、肥料や車両なども運搬しているという。

三年目の「六連の日」イベント

「『六連の日』イベントで島を広く周知し、航路便数の維持、ひいては島の人口を維持したい」と、イベントを主催した六連島自治会の武島正文会長（七二歳）は語る。

「六」が「連」なる六月六日を「六連の日」として（一社）日本記念日協会に登録したのは令和三年五月六日。離島振興を担う下関市企画課の西村主事の提案がきっかけだったという。行政と六連島自治会協力体制のもと、離島住民や六連島ファンの有志が一口一〇〇〇円、計一五万円を集めて登録費用にあてた。

「六連の日」イベントは今年で三回目。初年はコロナ禍で島内住民のみ、二年目は口コミで集まった六〇人ほどだった。三年目にしてようやく広く情報発信でき、百人を超える応募者があり、定員が限られている市営定期船の臨時便が出るほどだった。イベント参加費は渡船代の往復七一〇円を除き無料で、イベント経費は自治会費と地域おこし協力隊の活動費でまかなわれている。

今年のイベントの交流会では、県漁協六連島支店の婦人部が加工調理したヒジキご飯、島内産のジャガイモを使ったコロッケが参加者にふるまわれた。

その後、自治会が「六連島の一次産業体験」、関門海峡日本遺産協議会（事務局：市教育委員会文化財保護課）が「#関門のすたるじっくフォトウォークin六連島」の両プログラムを実施。参加者はどちらかを選択し、島の生業を見学・体験し、名所などをめぐった。

一次産業体験では、今回初めて漁業見学が組み込まれ、参加者は救命胴衣

を着けて漁船に乗り、島一周クルーズの途中で、小型定置網を引き上げる様子を洋上から観覧した。定置網の普段の漁獲はアジなどだ。六連八幡宮の絵馬には、明治期の定置網漁の様子が描かれており、当時の漁業形態も知ることができる。

イベント参加者にサツマイモの苗植えを指導する岡崎信和さん(左)。

つづいて参加者は数班に分かれて台地上の畑に向かい、サツマイモの苗植えを体験した。

フォトウォークでは、六連島灯台や国指定天然記念物の雲母玄武岩、ガーベラハウス、海岸の洞窟などを訪ねた。

下関市内のコンテンツ制作会社「＋ｉｓｍ（プラスイズム）」の代表を務める岡崎信和さん（四三歳）は、市の離島振興事業「気になる島！応援事業」を令和二年度まで会社で受託していた。今回のイベント内でも、サツマイモ「紅あずま」の苗植えを、前出の目黒一彦さんとともに参加者に指導する役割を担っていた。島内で採れるタマネギを、市内の産直マルシェ「あやさい」（豊北町）や飲食店「居酒ＢＡＲスペシャル」（長府中之町）を通して認知を高めようとしている岡崎さんは、「本土側の事業者に卸すにあたっては、経営者に島に来てもらい、島の人と畑仕事をすることを条件としている。島の魅力や産品をストーリーとして語れるくらいになってほしい」と話す。岡崎さんによると、六連島のタマネギは糖度が一三・三にも及ぶという。

「灯台のなかった幕末時代、近海は『ダークシー』と呼ばれていた。その当時、水先案内役を果たした『交流のＤＮＡ』が残っているのか、六連島の方は島外の人を柔軟に受け入れてくれる」と岡崎さんは語る。

イベントの最後には、島の土産品として、婦人部が島産の「天然干しヒジキ」を販売していた。島では昭和四〇年代から二〇年間ほどノリ養殖が営まれ、本土側工場で加工していたが、現在は生産していない。また、六連島はアルコールに漬けた「びん詰めウニ」発祥の地として知られているが、ウニが不漁で現在は製造されておらず、天然ヒジキなどが現在の名産品となっている。

島初の地域おこし協力隊員

今年の「六連の日」イベントを主に運営したのは、沖縄県名護市出身の地域おこし協力隊員、宮城宏明さん（二七歳）だ。下関市立大学で離島振興と財政について学んでいた宮城さんは、六連島を調査のフィールドにはしていなかったものの、当時から草刈りなどのボランティアとして足しげく島に通っていた。卒業後、一度は県外で就職したが、長崎県の五島で一棟貸しの宿を運営している大学の先輩に影響を受け、離島での活動を決心。ちょうど下関市が地域おこし協力隊員を募集しており、応募したところ市から六連島初の隊員として任命された。

「現在は定置網漁やビニールハウスの整備、出荷作業など、力仕事全般の手伝いをしています」

宮城さんの協力隊員としての任期は令和六年七月末まで。「来年の六月六日にも『六連の日』を力を入れて開催したい。任期後の明確な生計ビジョンは見えていないものの、六連島と島外をつなげる組織づくりに挑みたい」と抱負を語る。

イベントを運営する地域おこし協力隊員の宮城宏明さん。

●

六連島には診療所がなく、また巡回診療もなくなり、デイサービスが週に一度あるのみになっている。また商店や宿泊施設もなく、無線電話の基地局はあるが光ファイバは敷設されておらず、生活環境面での条件不利は否めない。改正離島振興法にもとづく支援メニューなどを活用し、環境整備につなげていきたい。

一方、六連島灯台（明治四年建造）が角島灯台（同九年建造）とともに、国内初の現役灯台として令和二年に国の重要文化財に指定されるなど、注目を集めている。

六連島は、大規模な人口を抱える下関、北九州の両都市からのアクセスが良く、人や物の往来が比較的容易だという地理的特性がある。島の風土がはぐくむ花卉やタマネギほか特産品をさらに活用し、イベントの継続開催で新たなファンを獲得するなど、関係人口の拡大に期待したい。（次号につづく）

（奥村・三木）